

# クザーヌスの『知ある無知』における 二つの「否定神学」

島田勝巳

## 1. 問題設定

——『知ある無知』における二つの肯定／否定神学像——

ニコラウス・クザーヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-1464) の主著『知ある無知』 (*De docta ignorantia*, 1440) における肯定／否定神学への言及は、「最大なるもの」 (maximum) としての神について論じられる第一巻に集中している。次の言葉は、本書の否定神学的基調を明瞭に伝えている。

神学的な事柄においては、否定が真であり肯定が不十分であることは明白である<sup>1)</sup>。

これは第1巻第26章からの引用だが、この章は「否定神学について」 (*De theologia negativa*) と題された同巻の最終章にあたり、第24章「神の名称と肯定神学について」 (*De nomine dei et theologia affirmativa*) から三章にわたって展開されるクザーヌスの神名論の結論部分と見なすことができる。ところが一方で、第1巻第4章には次のような発言も見られる。

(絶対的に最大なるものは) あらゆる肯定 (affirmatio) を超えてい

---

1) *De docta ignorantia* (以下 *DI*), I, 26, p. 56. "... manifestum est, quomodo negationes sunt verae et affirmationes insufficientes in theologicis;" 『知ある無知』岩崎充胤・大出哲訳, 創文社, 1966年, p. 75. 邦訳は本書を参考にした。ただし、訳文には適宜変更を加えている。

ると同時にあらゆる否定 (negatio) をも超えている<sup>2)</sup>。

自ずと明らかなように、前者では肯定に対する否定の契機の優位性が語られる一方で、後者では肯定／否定の両契機を超えたものとしての神の絶対性が焦点となっている。クザーヌス所有のディオニシオス文書 (*Corpus Dionysiacum*, 以下ディオニシオス) の引用や欄外注記を精査したバウアー (Ludwig Baur) によれば、前者の典拠は『神秘神学』第5章 (*De mystica theologia*, V, 1045d-1048b) である<sup>3)</sup>。後者についてバウアーは典拠を明示していないが、この肯定／否定の二項枠組みからすれば、これも同様に『神秘神学』などのディオニシオス文書を念頭に置いたものとして考えるのが妥当であろう。

では、『知ある無知』におけるディオニシオス解釈や肯定／否定神学の理解に見られるこうした齟齬は、いかに理解されるべきであろうか。もちろん、これら二つの立場をディオニシオス文書自体に読み取ることにも不可能ではない。だが、以下で示してみたいのは、クザーヌスのこうした二つの見解を、別個の問題構成から派生するものとして捉える解釈である。ここでは便宜的に、肯定に対する否定の優位を認める前者の議論を「形而上学的議論」、肯定／否定の両契機の超克について語る後者の議論を「論理的議論」と名づけ、それぞれの論脈を浮き彫りにしたい。端的に言えば、前者は神と被造物の形而上学的根拠をめぐる議論であり、後者は人間の認識能力をめぐる議論である。むろん両者は必ずしも截然と区別できるものではないが、むしろその混在にこそ、クザーヌスのディオニシオス解釈や否定神学像をめぐる容易な理解を阻む要因があるとも言えよう。いずれにせよこの問題は、クザーヌスが最晩年に至るまでディオニシオス文書への関心を抱き続けたという事実からすれば、彼の思想の理解にとっては看過できない問いであるように思われる<sup>4)</sup>。

2) *DI*, I, 4, pp. 10-11. "... maximum absolute ... super omnem affirmationem est pariter et negationem." 邦訳, p. 15.

3) Ludwig Baur, *Nicolaus Cusanus und Ps. Dionysius im Lichte der Zitate und Randbemerkungen des Cusanus*, Cusanus-Texte 3, Marginalien 1, Heidelberg, 1941, pp. 14-15, pp. 73-74.

4) 『知ある無知』におけるディオニシオス文書の引用について検討したものとして、次の論考も参照のこと。佐藤直子「クザーヌスによる偽ディオニシオスの受容——『知あ

ところで、クザーヌス思想における否定神学をめぐる問いは、従来のクザーヌス研究の主要なテーマの一つであった。その有力な解釈としてあったのは、『知ある無知』では肯定／否定神学の枠組みの中で否定神学の優位が説かれていたものの、続く第二の体系的論考である『推測論』(De coniecturis, c. 1443)以降はその否定神学的基調が弱まっていたとする見方である<sup>5)</sup>。『知ある無知』をめぐるこうした認識は——それ以降のテキスト解釈については見解が分かれるものの——思想史的研究の代表的論客によっても共有されている<sup>6)</sup>。ここではそうした立場を、『知ある無知』の「否定神学的読解」と呼んでおきたい。

ところが、従来優勢だったこうした解釈は、今日根本的な再考を迫られている。事の発端は、1995年に中世研究者のフネン(Maarten J. F. M. Hoenen)が匿名の草稿(Eichstätt Cod. St. 687)を発見したことにある。フネンはこの草稿に、『知ある無知』第二巻にある文章とほぼ逐語的に類似する文章を見出し、それがこのクザーヌスの主著の中核的議論の雛形(Vorlage)を成したとの結論に達したのである。またフネンによれば、この草稿こそがティエリを中心としたシャルトル学派出自の諸観念をクザーヌスに紹介した資料にほかならなかった<sup>7)</sup>。さらに近年

---

る無知』を中心に——」、『哲学科紀要』(上智大学哲学科)第29号, 2003年, pp. 49-70.

5) ハウプストによれば、『知ある無知』では肯定・否定神学の枠組みの中で否定神学の優位が説かれていたが、続く『推測論』以降はその枠組みを超えた方途が模索されるようになった。Rudolf Haubst, *Streifzüge in die cusanische Theologie*, Aschendorff, Münster, 1991, pp. 105-110. また、フラッシュも同様に、『知ある無知』では認められていた否定神学の位置付けが続く『推測論』では変更され、その優位性を失ったと見ている。Kurt Flasch, *Nikolaus von Kues, Geschichte einer Entwicklung*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2001, pp. 159-162, pp. 168-169.

6) こうした解釈によれば、『知ある無知』では神と被造物との懸隔が強調されたために否定神学的基調が際立っていたものの、一方でそれは被造物の存在論的基礎づけ、すなわち「内在の強化」という難問を抱え込むことになった。そこでクザーヌスは、『推測論』において人間の精神および被造物全般の存在論的基礎づけを図り、それを契機としてその否定神学的基調は退潮していったとされる。Ernst Cassirer, *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, Erster Band, Verlag Bruno Cassirer, Berlin, 1906. エルンスト・カッシーラー『認識問題——近代の哲学と科学における——1』須田朗・宮武昭・村岡晋一共訳, みすず書房, 2010年, pp. 20-21. Hans Blumenberg, *Die Legitimität der Neuzeit*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1966. ハンス・ブルーメンベルク『近代の正統性 III』村井則夫訳, 法政大学出版局, 2002年, pp. 47, 50, 156.

7) Maarten J. F. M. Hoenen, *Speculum philosophiae medii aevi. Die Handschriftensammlung des Dominikaners Georg Schwartz* († nach 1484), B. R. Grüner, Amsterdam, 1994.

に至り、米国のクザーヌス研究者アルバートソン (David Albertson) が、フネンによる発見とその解釈を批判的に継承しつつ、シャルトル学派の他の資料から新たな光を当てること、クザーヌス思想をシャルトルのティエリの受容史に位置づけるという斬新な議論を提示した<sup>8)</sup>。これは、従来はごく断片的な指摘に留まっていたクザーヌスに対するティエリの影響をむしろ決定的なものに見出すことで、クザーヌス思想全体を一種の「数学的神学」(Mathematical Theology) として捉えようとする野心的な試みである<sup>9)</sup>。従来の『知ある無知』の否定神学的読解にとって看過できないのは、アルバートソンの「“数学的神学” 的読解」が、ティエリ及びシャルトル学派の遺産を、クザーヌス思想にとって不可欠な構造を提供したとみる一方で、ディオニシオス文書などはあくまでもその体系を飾るために加えられたものに過ぎないとする見解である<sup>10)</sup>。

---

フネンがこの匿名の草稿の中にクザーヌスの『知ある無知』第二巻における特定の文章に酷似する文章を発見したのはこの翌年(1995年)のことであった。草稿には *Fundamentum naturae quod videtur physicos ignorasse* (『自然学者らが知らなかったと思われる自然の基礎』) という題目が付されており、草稿自体は三章構成であった。原文については以下を参照。M. Hoenen, “*Ista prius inaudita.*” Eine neuentdeckte Vorlage der *De docta ignorantia* und ihre Bedeutung für die frühe Philosophie des Nikolaus von Kues, *Medioevo*, 21 (1995), pp. 375-376. なお *Fundamentum Naturae* 草稿の転写は、この論考の pp. 447-476 に記載されている。

8) アルバートソンは、『知ある無知』の執筆当時、クザーヌスの手元には次のような資料があったと想定している。まずはシャルトルのティエリのテキストとして、*Tractatus de sex dierum operibus, Commentum super Boethii librum de Trinitate, Commentarius Victorinus*, またフネンが1995年に発見し、『知ある無知』との部分的酷似性を指摘した *Fundamentum naturae quod videtur physicos ignorasse*, さらにヘルメスの文献 *De septem septenis* である。David Albertson, *Mathematical Theologies: Nicholas of Cusa and the Legacy of Thierry of Chartres*, Oxford University Press, Oxford, 2014, pp. 176-177.

9) アルバートソンの言う「数学的神学」とは、端的には神や世界を数学によって理解しようとする言説を指し、歴史的には1)新ピタゴラス主義的一元論, 2)ロゴスとアリトモスの媒介, 3)四科に根ざす普遍数学を前提とするという特徴を持つ。Albertson, *ibid.*, p. 58. それは、古代末期の「キリスト教的新ピタゴラス主義」が中世初期にはボエティウスによって、さらに12世紀にはシャルトルのティエリらによって継承され、15世紀に至ってクザーヌスによって再発見されたとみる系譜学的なナラティブである。Albertson, *ibid.*, pp. 8-12. なお、クザーヌスに対するティエリの影響については、20世紀初頭のデュエムを嚆矢として夙に指摘されていた。Pierre Duhem, “Thierry de Chartres et Nicholas de Cues,” *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, 3 (1909), pp. 525-531.

10) Albertson, *ibid.*, pp. 175-180.

もとよりこうした“数学的神学”的読解について検討することが本稿の目的ではない。ここで注目したいのは、以上のような論点の違いにも関わらず、否定神学的読解と“数学的神学”的読解の双方が、『知ある無知』執筆当時のクザーヌスの否定神学の立場を半ば自明視しているという点である<sup>11)</sup>。だが、以下で見ていくように、否定神学やディオニシオスの解釈をめぐるこの時点でのクザーヌスの見解は、未だ確固たるものではなかった。彼が『知ある無知の弁明』(*Apologia doctae ignorantiae*, 1449)において語った自らの「啓示体験」についての次のような「告白」は、そのことを示唆するものとして捉えられる。「友よ、私は告白する。あの高みから私がこの思想を受け取った当時、私はディオニシオスについても、またいかなる真の神学者たちについても注視していなかったことを」<sup>12)</sup>。この発言は、教皇特使としての任を終えたクザーヌスが、1438年にコンスタンティノーブルからフェララに向かう船上で「対立の一致」(*coincidentia oppositorum*)の着想を得たとする体験について、それから十年以上を経て述懐したものである。彼はここで、ディオニシオスをはじめとする神学者たちによる影響についてはもとより、1438年から1449年の間にその理解に何らかの変化が生じたことを自ら認めていると言えよう。つまりそれは、1440年代におけるクザーヌスのディオニシオス解釈や否定神学理解、さらにはその変化の有り様を探るうえでも鍵となる発言なのである。以上のような問題意識に基づき、本稿では、従来の研究ではほぼ等閑に付されてきた、『知ある無知』の否定神学理解における“揺れ”が意味するところについて検討してみたい。

## 2. 形而上学の問題構成における肯定／否定神学

『知ある無知』においてクザーヌスは、ディオニシオスを「あの神的

---

11) 例えば、クザーヌスの資料としてティエリ及び他のシャルトル学派のテキストを半ば特権化するアルバートソンの解釈も、『知ある無知』における「否定」の契機や否定神学の含意について、議論の文脈に即した詳細な検討を行っているわけではない。Albertson, *ibid.*, pp. 175-180.

12) “Fateor, amice, non me Dionysium aut quemquam theologorum verorum tunc vidisse, quando desuper conceptum recepi;” *Apologia doctae ignorantiae*, ed. R. Klibansky, 1932, p. 12.

なるものの最大の探求者」(maximus ille divinorum scrutator)と賞賛しつつ、特に第1巻第24章から第26章にわたり、その肯定神学と否定神学の枠組みを踏襲した議論を展開している<sup>13)</sup>。まず注目したいのは、この議論における神名の問題をめぐる観点と、神と被造物の存在論的懸隔をめぐる観点との関係性である。

肯定神学をめぐる議論においてクザーヌスは、神は諸事物の総体(universitas rerum)であるが故にいかなる固有な名称(nomen proprium)も適合しないとすヘルメス・トリスメギストスに言及しつつ、聖書的伝統の観点からそれに若干の修正を加えている。クザーヌスによれば、神に固有な名称とはテトラグラマトン(tetragrammaton=YHWH)であり、語り得ないものである。それは神に固有な本質によって(secundum essentiam propriam)神に適合する。一方で、この固有な名称以外はすべて特殊な名称(particularia nomina)であり、それらは本来的には神には適合し得ない<sup>14)</sup>。それらが神に適合するとすれば、それはあくまでも神から「無限に劣った仕方においてのみ」(nisi diminute per infinitum)可能となる<sup>15)</sup>。あるいは、そうした非本来的なものとしての特殊・肯定的な神名は、神の「被造物に対する何らかの関係にしたがって」(secundum aliquam habitudinem ad creaturas)神に適合する。「肯定の神学によって神について言われることは何であれ、被造物との関係において基礎づけられている」<sup>16)</sup>。

注目すべきは、この議論に頻出する「被造物への関係において」(in respectu ad creaturas)、あるいは「被造物に対する関係にしたがって」といった表現の形而上学的含意である。この点は、「縮限的に最大なるものとしての宇宙」(universum ut maximum contractum)を主題とする第二巻の議論と繋がっている。特に重要なのが、これらの表現においては、ある名称が被造物を原因(causa)として神に適合するとされているのではないという点である。これは明らかにディオニシオスの見

13) *DI*, I, 16, pp. 30-31. 邦訳, p. 41.

14) *DI*, I, 24, pp. 48-49. 邦訳, pp. 65-66.

15) *DI*, I, 24, pp. 49-50. 邦訳, p. 67.

16) *DI*, I, 24, p. 51. "Quare quidquid per theologiam affirmationis de Deo dicitur, in respectu creaturarum fundatur, ..." 邦訳, p. 70.

解とは異なる。ディオニシオスによれば、神が万物の原因として見られる場合、「存在者についてなされるすべての主張を、神についても定立し肯定しなければならない」が故に肯定神学が要請される。ディオニシオスにとって、すべての名称が讃えられるのは、神が万物の善き原因であるからに他ならない。逆に、神が万物を超えるものとして見られる場合には、否定神学が要請される。だがその際、「肯定と否定が対立していると考えるはならない」と付言されている<sup>17)</sup>。

一方、クザーヌスにとっても、被造物は神からの存在である (*creatura, quae ab esse est*)<sup>18)</sup>。だが、被造物には「縮減され (*diminuta*)、他性化され (*altera*)、区別される (*distincta*) ということが生じるが、(それは) そうしたことには原因が存在しない」からである<sup>19)</sup>。縮減された存在 (*esse diminutum*) としての被造物は、そうした消極的な性質を積極的な原因 (*causa positiva*) としての神から受け取るのではなく、ただ偶然的に (*contingenter*) そのようなものとしてあるとされる。したがって、クザーヌスにとって、被造物における分割性 (*divisibilitas*) や相違性 (*diversitas*)、多性 (*pluralitas*) といった性格は、神を原因とするものではあり得ない。にもかかわらず特殊・肯定的名称が神に適合するのは、被造物に対して神が一方的に無限の能力 (*infinita potentia*) あるいは最高の能力 (*summa potentia*) を有するためである<sup>20)</sup>。

このように、ディオニシオスが万物の原因であると同時にそれをを超えるものとしての神について肯定／否定神学の相補性を認めていたのに対し、クザーヌスは被造物における他性という性格を偶然性として捉え、絶対的必然性 (*absoluta necessitas*) としての神との差異を強調するなかで、特殊・肯定的名称の適合性を認めている。クザーヌスの肯定神学

---

17) *Corpus Dionysiacum*, II, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1991, *De mystica theologia*, 1000B. 「神秘神学」(熊田陽一郎訳), 『キリスト教神秘主義著作集 第一巻』教文館, 1992年, p. 266. 「神秘神学」(今義博訳), 『中世思想原典集成 3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』上智大学中世思想研究所, 1994年, p. 450.

18) *DI*, II, 2, p. 65. 邦訳, pp. 85-86.

19) *DI*, II, 2, pp. 65-66. “ita quidem contingit rebus, quoniam maximum esse non possunt, ut sint diminuta, altera, distincta et cetera huiusmodi, quae quidem causam non habent.” 邦訳, p. 87.

20) *DI*, I, 24, p. 50. 邦訳, p. 68.

理解の基本にあるのは、無限に劣った存在としての被造物に対して神が取り結ぶ、この超越的・絶対的な関係性の視点である。

ここで重要なのが、被造物に対する神の絶対的超越性を強調する以上のようなクザーヌスの形而上学的見解が、「縮限」(contractio)なる概念の導入によって可能になったということである。彼はこの概念を、第一義的には神と宇宙(universum)との関係を描くために用いているが、そこで強調されるのはやはり両者の懸隔である。クザーヌスによれば、個々の被造物において、神は宇宙の「絶対的何性」(quidditas absoluta)として、宇宙は「縮限された何性」(quidditas contracta)としてある。この意味で宇宙は、「具体的なもの」(concretum)とも言われる。つまり、被造物はその存在性(entitas)を絶対的何性としての神から与えられているが、個々の事物における他性や相違性といった性格の原因は決して神に帰されるべきものではない。むしろそれは、いわば具体的かつ対象的な事物の規定的本質をなす宇宙の「縮限された何性」に帰されるべきものなのである<sup>21)</sup>。

さらに、神名における固有と特殊という対比は、クザーヌスが神と被造物との形而上学的連関を規定するうえで用いた包含(complicatio)と展開(explicatio)の対概念によってより明確な理論化が図られ、否定神学の必要性もその観点から説明される。それによれば、神はその一性において万物を包含する一方で、その一性は事物の多性において展開する<sup>22)</sup>。したがって、肯定神学において用いられる被造物から得られた名称もすべて、「一で語り得ない名称(unum ineffabile nomen)によって包含されているものを展開している」<sup>23)</sup>。だが、あくまでも似姿(imago)として捉えられるべき被造物における神性の展開は、往々にしてそのまま真理として捉えられることで、偶像崇拜(idolatria)に陥った。先にみたクザーヌスの形而上学的観点からすれば、展開されたものとしての神の名称は、自らのうちにいかなる存在論的根拠も持ち得な

21) *DI*, II, 4, pp. 72-75. 邦訳, pp. 97-102. なお、『知ある無知』の宇宙論における contractio 概念の意義は、注7で言及した近年の新資料の発見と関わる重要な論点だが、本稿の関心と紙幅の関係上、これ以上立ち入ることはできない。別稿にて改めて論じたい。

22) *DI*, II, 3, p. 70. 邦訳, p. 94.

23) *DI*, I, 25, p. 53. "Quae quidem omnia nomina unius ineffabilis nominis complicationem sunt explicantia;" 邦訳, p. 71.



いからである。こうしてクザーヌスは、被造物との関係性において神に名称を付与する肯定神学の危険性に論及しつつ、それを補完するものとしての否定神学の意義を強調する。「否定の神学は他方の肯定の神学を補うためには必要不可欠なもので、前者がなければ神は無限な神としてではなく、むしろ被造物として礼拝されることになるだろう」<sup>24)</sup>。「神学的な事柄においては、否定が真であり肯定が不十分であることが明白である」という先に引用した発言は、こうした観点から導出された見解であった。さらに彼は次のようにも語っている。

……大ディオニシオスも語ったように、われわれは排除 (remotio) と否定 (negatio) によって、神についてより真実に語る。ディオニシオスは、神は真理でもなく知性でもなく光でもなく、言葉で言われ得るいかなるものでもないと考えた。……この否定神学に従う限りでは、神はただ無限なるものであるだけである<sup>25)</sup>。

こうしてクザーヌスは、被造物から得られる名称を肯定的に用いる肯定神学と、逆にそれらを否定する否定神学の枠組みの中で、偶像崇拜の危険性を根拠として、前者に対する後者の優越性を主張する。こうした見解の背後に、神と被造物との存在論的差異をめぐる彼独自の認識があったということを考慮すれば、この議論において自ずと否定神学の意義が前景化するのも頷けよう。従来のクザーヌス研究において有力だった見解、すなわち、『知ある無知』の段階では肯定神学に対する否定神学の優越性が強調されていたとする解釈は、神と人間、さらには被造物全般との形而上学的連関をめぐる以上のような問題構成に依拠した見方だったのである。

---

24) *DI*, I, 26, p. 54. "Et ita theologia negationis adeo necessaria est quoad aliam affirmationis, ut sine illa Deus non coleretur ut Deus infinitus, sed potius ut creatura;" 邦訳, p. 73.

25) *DI*, I, 26, pp. 54-55. "Docuit nos sacra ignorantia Deum ineffabilem; et hoc, quia maior est per infinitum omnibus, quae nominari possunt; et hoc quidem quia verissimum, verius per remotionem et negationem de ipso loquimur, sicuti et maximus Dionysius, qui eum nec veritatem nec intellectum nec lucem nec quidquam eorum, quae dici possunt, esse voluit; ... secundum hanc negativam theologiam, ... est infinitus tantum." 邦訳, pp. 73-74.

### 3. 論理学的問題構成における肯定／否定神学

ところが、『知ある無知』におけるクザーヌスの否定神学的思考には、以上のような形而上学的な議論とは別のもう一つの論点がある。それは、命名の作用と理性の機能の連関を核としつつ、その論理学的原理の超克を視野に収めた肯定／否定神学の議論である。言い換えればそれは、自らに対立するものを持たない最大なるものとしての神にはいかなる名称も本来的には適合し得ないとする先に見た根本テーゼを、人間の認識能力と論理の限界の問題を接合させて語ろうとするものである。認識能力と論理法則を接続するこの視点は、これ以降のクザーヌス思想にも一貫して見ることができる。

クザーヌスによれば、名称は知性 (intellectus) よりも劣った理性 (ratio) の働きによって、諸事物を区別するために与えられる。つまり理性とは一つのを他のものと区別する際に働く能力であり、命名とはそうした理性の機能によるものである<sup>26)</sup>。したがって、理性によって与えられるいかなる名称も、自らと対立する別の名称との対比において初めて意味を獲得することになる。特殊な名称、つまり固有な名称を除くあらゆる名称が「本来的には」神には適合し得ないとされるのも、例えば「真理」(veritas)／「虚偽」(falsitas)、「徳」(virtus)／「悪徳」(vitiū)といったように、それらが本質的に自らと対立する他の名称との対比において意味を獲得せざるを得ないからである<sup>27)</sup>。こうして理性が「矛盾するもの」(contradictoria) を超えられないという限界を持つ限り、最大なるものとしての神に与えられる名称は、自ずと比の媒介によって可能となるとされる。

このように、この議論の核心をなすのは、理性が不可避的にもたらすとされる命名における矛盾、対立 (oppositio)、あるいは区別 (discretio) といった契機である。重要なのは、先に見た形而上学的問題構成における対立や区別が、被造物にとっての基礎的な存在論的条件として語られていたのに対し、この議論の文脈では一貫して人間の理性の条件

26) *DI*, I, 24, p. 48. 邦訳, p. 65.

27) *DI*, I, 24, p. 50. 邦訳, p. 67.

として語られているという点である。ここで念頭に置くべきは、後に『知ある無知の弁明』において論点の一つとなるアリストテレス論理学における矛盾律の原理である。『知ある無知』の段階では明言はされていないが、クザーヌスにとって、矛盾律をはじめとするアリストテレスの論理学は理性に基づく思考の原理にほかならず、その要諦は対立や区別といった差異を越えることができないという点にこそ認められる。つまりここでは理性とは、端的には論理学的思考の圏内で働く能力として捉えられているのである。一方で彼は、神はそうした対立の契機を一切超えているが故に、理性によって付与される神への肯定的名称は適合し得ないとする<sup>28)</sup>。理性が不可避免的に内包する矛盾や区別といった契機も、当の論理を超えた神にとってはまったく問題にはならないとされる。この点は、先の形而上学的な議論においては神の無限の能力として語られていた。だがここでは、論理学的原理を超えた位相が焦点となっているという意味で、むしろそれは「脱論理学的」とも言うべき問題構成である。もっとも、『知ある無知』における矛盾律の議論はまったく明確なものとは言い難い。それはその後のクザーヌスの思想的展開において、特に知性と理性の区別がより鮮明化されるに従って深められていった洞察である<sup>29)</sup>。要するに、「対立の一致」の洞察から何とか論理学的思考に抗おうとするここでの議論こそが、これ以降のクザーヌス思想の中核を規定していくことになるのである。

こうした論脈からすれば、以上のような対立の契機を論拠とする議論、すなわち理性に基づく命名作用、および肯定神学の限界に関する批判的な視点が、神の知解の（不）可能性をめぐる問題に結びつくことも頷けよう。先に紹介した引用を、ここではその前段を含めた形で改めて見ておきたい。

---

28) *DI*, I, 24, p. 49. 邦訳, p. 66. この点については以下の拙論でも触れている。「クザーヌスの認識論と存在論——『知ある無知』をめぐる——」, 『天理大学学報』第63巻第2号, 2012年, pp. 19-30.

29) *De coniecturis*, ed. J. Koch et K. Bormann, 1972. *Apologia doctae ignorantiae*, ed. R. Klibansky, 1932. 以下の拙論では、それぞれのテキストの読解を試みている。「『推測』と〈否定神学〉——クザーヌスの『推測論』を中心に——」, 『天理大学学報』第64巻第2号, 2013年, pp. 43-57. 「『知ある無知』の争点とそのコンテクスト——ヴェンクとクザーヌスの論争をめぐる——」, 『天理大学おやさと研究所年報』第18号, 2012年, pp. 63-81.

……対立 (oppositiones) は、超えるものと超えられるものとを許すものに対してのみ適合するのであって、しかもこれらに対しても、さまざまな差別によって適合するのである。しかし、「絶対的に最大なもの」に対しては、対立は決して適合しない。というのも、それは存在し得るあらゆる対立を超えているからである。したがって「絶対的に最大なもの」は、絶対的に現実に存在し得るすべてのものであり、かついかなる対立をも欠いており、「最小なもの」が「最大のもの」に一致するほどである。それ故に「絶対的に最大なもの」は、あらゆる肯定 (affirmatio) を超えていると同様に、あらゆる否定 (negatio) をも超えているのである (傍点引用者)<sup>30)</sup>。

先に見た命名の作用をめぐる見解では理性の限界について語られていたが、ここでは神の絶対性が焦点となっている。とはいえ、いずれの場合も、人間による神の知解不可能性の原因を対立の契機に求めているという点において、やはり同じ論理的な問題構成として見なし得るものである。既に触れたように、バウアーの古典的論考にはこの発言の典拠に関する言及は見られない。そのことから、クザーヌスが自らの思想をディオニシオスの注釈として捉えていたのではなく、むしろ自らの思想を彫琢するうえでディオニシオス文書を用いたということが窺えよう。このように見ると、形而上学的な視点と同様に、この議論の背後にも、やはり神と被造物との懸隔についての認識があることが浮き彫りになる。「論理的」議論の場合、論理の圏内において作用する理性と、それによっては捉えられない神の存在との差異への視点はその基底をなしているのである。

既に明らかなように、以上の議論では形而上学的議論において強調されていたような肯定神学に対する否定神学の優越についてではなく、肯定と否定とを共に超えるものとしての神について、つまり肯定と否定の

30) *DI*, I, 4, pp. 10-11. "Oppositiones igitur hiis tantum, quae excedens admittunt et excessum, et hiis differenter conveniunt; maximo absolute nequaquam, quoniam supra omnem oppositionem est. Quia igitur maximum absolute est omnia absolute actu, quae esse possunt, taliter absque quacumque oppositione, ut in maximo minimum coincidat, tunc super omnem affirmationem est pariter et negationem." 邦訳 p. 15.

彼方にあるものとしての神の把捉不可能性について論じられているという点である。上の言葉に続けて、クザーヌスは次のように述べている。

だが、このことはわれわれの知性をまったく超越する。というのも、われわれの知性は、その原理において矛盾するもの (contradictoria) を推論の道によって合一することができないからである。……それ故、絶対的な最大性が無限であり、それは何にも対立せず、それと「最小のもの」とが一致するということを、われわれは理性の一切の推論を超え、把握されない仕方で知るのである<sup>31)</sup>。

この視点はまさに、クザーヌス思想全体に通底する「対立の一致」の命題に他ならない。最大なるものであると同時に最小なるものとしての神は「無限な一性」(unitas infinita)とも言われるが、そこには「あらゆる相対的な対立に先立つほどの同一性が存する」(tanta est ibi identitas, quod omnes etiam relativas oppositiones antecedit)<sup>32)</sup>。神においてはいかなる相違性 (diversitas) や他性 (alietas) も同一性である。したがって、ここで語られる肯定／否定についても、両者が対立する契機であるが故にこそ、神に対して両者は超克されるべきものとされるのである。

#### 4. 結 語

以上見てきたように、形而上学的問題構成と論理学的問題構成という視点を導入することで、『知ある無知』におけるクザーヌスが、一方では神と被造物の存在論的懸隔の認識に基づきつつ、肯定神学に対する否定神学の優位について語りながらも、他方では論理学的思考の限界の乗り越えを図るべく、肯定と否定の双方の契機を超克する認識のあり方を論じていたことが浮き彫りになったのではないだろうか。この時点での

---

31) *DI*, I, 4, p. 11. “Hoc autem omnem nostrum intellectum transcendit, qui nequit contradictoria in suo principio combinare via rationis, quoniam per ea, quae nobis a natura manifesta fiunt, ambulamus; quae longe ab hac infinita virtute cadens ipsa contradictoria per infinitum distantia connectere simul nequit. Supra omnem igitur rationis discursum incomprehensibiliter absolutam maximitatem videmus infinitam esse, cui nihil opponitur, cum qua minimum coincidit.” 邦訳, p. 16.

32) *DI*, I, 21, p. 42. 邦訳, p. 57.

クザーヌスの否定神学像，あるいはディオニシオスの否定神学をめぐる理解の“揺れ”は，このように錯綜した問題構成上の性格に由来するものであったように思われる。これは従来のクザーヌス研究において優勢だった否定神学的読解によっても，また近年のアルバートソンによる“数学的神学”的読解によっても，特に指摘されてこなかった論点である。

ところで，クザーヌスは 1440 年代を通して，さらには晩年に至るまで，ディオニシオスを引用しつつ，肯定／否定神学についての思索を深めている。そのことは，自らをディオニシオス研究者として描いている 1462 年の『非他なるもの』(*De non aliud*) においてももっとも明瞭に表れている<sup>33)</sup>。1440 年代については，『知ある無知』以降，ここで形而上学の問題構成として論じた肯定神学に対する否定神学の優位性という主張が影を潜めていったのは明らかである。だがそれは，ハウプストが論じたように肯定／否定双方の超克という立場に取って代わったからでもなければ，フラッシュが指摘したように否定神学的基調から徐々に肯定神学的基調に変容していったからということでもない。さらにそれは，アルバートソンが想定していたようなシャルトル学派の影響圏に留まるものでもない。本稿で見てきたように，『知ある無知』の時点ではクザーヌスの否定神学理解は思想内在的な齟齬をきたしていたのであり，それ以降についても，彼が自らの否定神学的思考をいかにキリスト論や三位一体論との連関において収斂させていったのかという点に注目することで，その思想的全体像の重要な一側面を浮かび上がらせることができるように思われる。

本稿は 2017 年 11 月に岡山大学で開催された中世哲学会第 66 回大会での発表原稿に修正を加えたものである。なお，クザーヌスのテキストについては以下の校訂版全集を使用した。

Nicolai de Cusa, *Opera Omnia*, I. *De docta ignorantia*, iussu et auctoritate academiae litterarum Heidelbergensis ad condicum fidem edita, ed. E. Hoffmann et R. Klibansky, 1932.

33) *Directio speculantis seu de non aliud*, ed. L. Baur et P. Wilpert, 1944.

- *Opera Omnia*, II. *Apologia doctae ignorantiae*, ed. R. Klibansky, 1932.
- *Opera Omnia*, III. *De coniecturis*, ed. J. Koch et K. Bormann, 1972.
- *Opera Omnia*, XIII, *Directio speculantis seu de non aliud*, ed. L. Baur et P. Wilpert, 1944.